

## 卒業記念スペシャル、読書をより楽しむための本の読み方

6年生のみなさん、卒業おめでとうございます。みなさんはまもなくこの豊田小学校を卒業し、4月からは中学生として新たなステップを踏み出します。今回の図書館だよりは、中学生になってからも役に立つ、「読書をより楽しむための本の読み方」と題して、いくつかの提案をしようと思います。ただし、最初に述べておきますが、本の読み方に「正しい本の読み方」というものは存在しませんし、楽しみ方も、解釈の仕方も人それぞれです。ここで私が記述することは、普段本を読むときにはあまり気にも留めないようなことを、あえて気にして読むとまた新たな魅力を発見ができるのではないか、という私の勝手な思い込みによる提案です。皆さまのお考えとは異なっているところが多々あるかと思いますが、どうかお許してください。

ではいくつかの提案を、2冊の絵本を例に挙げてじっくり観て行こうと思います。

1冊目はシェル・シルバスタインの作品「おおきな木」を取りあげてみます。この絵本を、男の子への想いが強い大きな木の、悲しくもあるが最後までしあわせなハッピーエンドなお話。だけで終わってしまっただけでは、あまりにも勿体ないと思いますよ。この本にはいくつかの魅力が隠されています。



## ① 「本は、最初から最後までゆっくり読む」

テストの問題文を読んだりするなど、どうしても早く読まなくてはいけない

場合は別として、純粋に読書を楽しむためには極力ゆっくり時間をかけて読みましょう。場合によってはもう一度前のページに戻って読み返すことも重要です。作家は言葉のプロですから、一語一句吟味に吟味を重ねて書いています。早く読むことは一流のシェフや板前さんが一生懸命心を込めて作った料理を、香りも楽しまず、ただ空腹を満たすために胃に流し込むようなものではないでしょうか。

まず、表紙には一人の男の子が木から落ちてくる、りんごを受け止めようとしている絵が描かれています。しかしよく見ると、木の形が不自然なことに気が付きます。木の幹が大きく曲がっているのです。それに1本だけ伸びている枝が、まるで人の手のようにりんごの実を男の子に手渡しているように見えませんか。そのわけは、タイトルページをめくるとすぐに出てきます。そこには通常、本の最後のページに記載される「奥付」に書かれた英文の原題名にありました。「THE GIVING TREE」、直訳すれば、「与える木」です。この表紙の絵がお話の導入部分であると同時に、お話の象徴であることが分かります。普通「奥付」は映画のエンドロールと同様に作品の最後に記載されるものです。ではなぜこの本は「奥付」を最後に持って来なかったのか??? それは最後のページを見れば明らかです。

そこには村上春樹氏の「訳者あとがき」が載っているからです。「訳者あとがき」には、本の内容がより分かりやすくなるように、外国文学の研究者が書いた説明書的なものもありますが、この本のように外国で出版されている本を訳者が読んで、ぜひ日本にも紹介したいとの想いから書かれたものもあります。一概に決めつけるのは危険ですが、前者は学者が書いた文章であり、後者は作家が書いた文章と言えるかもしれません。この本の「訳者あとがき」は、この部分だけでも十分に読む価値のある、一つの村上作品だと言えるでしょう。なぜならこのたった2ページの中には、読書の素晴らしさのすべてが凝縮されているからです。出版社の方もこれ以上は蛇足だと考えたのかもしれないですね。

では次に本文の絵を観てみましょう。登場するのは「りんごの木」と「少年」だけです。(厳密には1箇所だけ少年の彼女と思われる少女の足が描かれていますが)少年が成長するにつれて姿を変えて行くのは誰もが気が付きます。では木はどうでしょう。木もやはり少年と同じようにストーリーの進行に伴

い、少しずつ幹の曲がり方や、枝葉の伸び方など、姿を変えていくさまはあたかも人間と同じように、あるいはそれ以上に動きがあることが分かります。それは終盤になって幹が伐り倒され、切り株だけになっていても、しゃんと背筋を伸ばしているように描かれていることから分かります。

## ② 「違和感に注意する」

次は本文を覗いてみましょう。この本を読んだ方は、私と同じように感じられる方もいるのではないのでしょうか。冒頭から木と少年の馴れ初めが描かれ、主に前半は少年の愛が書かれ、後半は木の母性がメインに書かれています。しかし、少年がしばらく姿を見せずに、中年になってからもどってきた少年が、ふねを作るために木の幹を伐り倒した時、それまでは「木はしあわせになりました」「木はしあわせでした」と木が少年への献身的な愛を一貫してきたのに、急に「それで木はしあわせに・・・なんてなれませんか」と開き直りともとれる一文が出てきます。「えーっ、なにこの違和感！」しかも、最後にはまた「それで木はしあわせでした」で終わります。では作者はなぜこのような「違和感」のあるシーンを入れたのでしょうか。作家はお話のプロです。そこには確たる意思があって敢えて読者に違和感を与えるシーンを入れているはず。あくまで私個人の考えですが、一つは「違和感」を与えることによってそのシーンをより際立たせる場合。もう一つはお話の長い小説などの回想シーンで時々見かけますが、一旦ストーリー展開を切っても、ずっと前のシーンを読者に思い起こさせ、相関関係などを読者にもう一度整理させてから新たな展開へ移行する場合などがあると思います。いずれにしても読者を、作者が伝えたい核心へと導く強いインパクトを残します。

2冊目は、マーガレット・ワイズ・ブラウンの作品「たいせつなこと」を取り上げて、次の2点に注目してみましょう。



## ③ 「接続詞に注意する」

この絵本は、皆さんが普段目にしていない道具や、自然界のできごとや、最後にはあなたのこと（あなたが成長しておとなになることも、自然なできごとと捉えている。）を淡々と平仮名だけで分かりやすく、当たり前のこととしていたってシンプルに綴られていきます。ではなぜこの絵本が2001年の初版から15年の間に（図書館にある本は2015年10月発行）48刷もの増刷を続けているのか??

その秘密は、本文のすべてのページに出てくる接続詞、「でも」以後の文章にあります。言うまでもなく接続詞にはさまざまあり、話の場面や雰囲気を変えるための「ところで」や、付け加える意味で使う「それに」などもありますが、「でも」や「しかし」はそれまでとは反対する意味で使われます。「しかし」が文書的であるのに対し、「でも」はより口語調です。ですから、簡単に親しみやすい「でも」を使って逆説的に強調しており、平易に感じるものが、実は簡単ではないことが読者に伝わってきます。

## ④ 「逆の場合も考えてみる」

③の提案と並行する部分もありますが、先ほどの「でも」以降の部分逆だったらどうなるかを考えてみるのもまた一つの楽しみ方かもしれません。例えば「かぜ」の部分引用すると、「かぜはふく かぜは めにみえないけれど（中略）でも かぜに とってたいせつなのは ふく と いうこと」ですから、「かぜが ふかない」とどうなるか……。その方が作者の伝えたいことが、よく見えたりするかもしれません。

卒業生のみなさん、どうかこれからも読書を楽しんでください。今まですべての豊田小の子どもたちに伝えてきた言葉を載せます。「本はいつでも 君の友だち」 では お元気で。